

## 〃車イスで歩ける街づくり〃

### アプローチ

館 二一 千 雄

横断歩道橋というものを考えてみると、そこにはなにやら押しこめられてしまった人間性のようなものを感じるのである。

高度成長などという怪しげな笛、太鼓に踊らされて、借金経済の知恵ばかり身についた結果が、ネズミ算ほどクルマが増えて、手の下しようもなくなってくると、今度は苦肉のアイデアとばかり、やたらに横断歩道橋を設置する有様だ。

それをまた、これで交通事故がいくらか少なくなるだろう、などとのんきな顔で眺めている人が多いのだから情けない。

いったい全体、人間が主体なのか、クルマが主体なのか、それをあいまいにして連者な人間ばかりが涼しい顔でいるのが余計はらだたしい。

だから身体障害者と呼ばれるわれわれが、今さらのように「車イスで歩ける街づくり」運動なるものを展開せざるを得ないのだ。

去年の暮、九台の車イスを動員して、われわれは始めてのデモンストレーションをかねた実態調査を行なった。

障害者だって人間であり、市民なのだから街にも出るし、いろいろな公共施設も利用する。しかし、実際には街というものが、どれほど障害者を受け入れてくれるのだろうか……。それをチェックする必要がわれわれにはあったからだが、結果はいうまでもなく惨憺たるものだった。

歩道は彎曲している上にでこぼこで、段差がやたらにあつて、とても単独では街になど出られたものではない。これでは障害者ばかりでなく、老人や妊産婦にとっても危険極まりない状態だといえる。これはほとんどすべての公共施設についても言えることなのだが、すでに設計の段階で利用者の基準を身体障害者や老人など困難を覚える者に置いていないことだけは確かだ。

だから当然のことながら民間施設に対してだって、指導などとても面映くてできるわけがないのだ。

こんな事をいつまでも許しておく、障害者はいつまでもたつてもあとをなく家に居ればいい……みたいな既成概念をますます固定させてしまうことになる。

障害者が市民として生きていくためには、まず生活圏の拡大をはからなければならない。